

新刊 紹介

"... the difference between a college man and a man lacking in college is that he has the resource of books, that he knows there's a book side to everything."

田畑 忍著（法学部教授）「憲法重要問題研究」—憲法論争—発行所、京都、高城書店、A5四一五頁、定価（普及版）九〇〇円、（上製版）一二〇〇円

本書は著者が、この数年間に、時々の学問的関心により、あるいはまた時代的の必要に促されて、執筆されたもののうちから、三十六篇を選んで憲法の体系に従って編集された論文、論争集である。本書の狙いは、違憲的権力の攻勢にたいする反撃であつ

て、著者自身の立場は強い護憲論であり、憲法主義である。「日本国憲法は、憲法擁護の義務を、国民に対して定める。また公務員に対して定める。前者については第十二条前段があり、後者については第九十九条がある。……第十二条前段の憲法擁護義務の憲法規範は、言葉を変えていえば、国民の抵抗義務の憲法規範であつて、それは、すべての基本的人権の規定のうちに含んでいる抵抗権を強化するものといつてよい。……しかも、かなしむべきことは、国民の多くのものが、この規定の、このような意義に目ざめていないことである。（三六〇頁）」こうして著者は、憲法擁護の義務を果す上からも、憲法の正しい解釈、憲法保守の徹底、そして権力主義と官僚主義の政治と学説と闘うことの必要を力説されている。

土肥昭夫著（神学部助教授）人と思想シリーズ「内村鑑三」発行所、東京、日本基督教団出版部 B6二九七頁、定価四二〇円
内村鑑三の研究文献はおびただしい。彼自身の著作、雑誌、および彼が関係した新聞の寄稿文などがばう大であるとともに、彼

の伝記もきわめて多い。宮部金吾の「内村鑑三君小伝」をはじめ、矢内原忠雄、正宗白鳥、岡邦雄、森有正、亀井勝一郎などの著をはじめ、鈴木俊郎編のすぐれた伝記がすでに刊行されている。しかも、ここに改めて内村伝が刊行された本書の意義は、著者がそのまえがきでのべているように「筆者は内村鑑三に私淑するものでも、いわゆる無教会主義に賛同するものでもなければ、また教会側を代表して彼の教会論その他を批判しているものでもない。われわれがここでまず取りあげたいことは、彼をひとりの人物として、人間としての苦悩や誤謬さえ犯しつつも、なお福音に生きるがゆえに、もだえたたかいつつあるキリスト者として、描き出すこと」にあるのだろう。内村にアームスト大学入学の機会を与えたのは新島先生であり、しかも内村がアームスト生活で学んだものの中で、彼の考え方に大きな役割をなしたものは、彼の聖書と歴史の研究である。阿部行蔵の「若き内村鑑三」や、同志社C・S・グールの研究につづいて、本書が同志社人の手によって刊行されたのは、意味深いものがある。

小倉囊二著（文学部助教）「公的扶助」

貧乏とその対策―発行所、京都、ミネルヴァ書房、新書二三八頁、定価三七〇円

著者が英国留学から帰朝後にまとめた第一冊。「公的扶助」についてのこれまでの社会科学の解明には十分なものがあったとはいえない。本書は現代日本の「貧しさ」を、どううけとめるかという今日の切実な問題意識からの構造・系譜・内容の全般にわたって、わかりやすく釈明した、数すくないこの方面の良書である。「あとがき」で著者はこうのべている。「せいじっぱい書いてみたものの、いまだ、こぼれ落ちた問題がたくさんあると思っています。公的扶助、社会保障のしくみに関心をもつ現場の人々、研究者、学生、いろんな立場からの批判、叱正を期待しています。複雑な課題で、手にあまると思いながら、なんとか一つの考えのすじみちを通してみたいと試みてみました。公的扶助の認識、実践にすこしでも役立てばと希っています。」

大塚達雄著（文学部助教）「ソーシャル・ケースワーク」―その原理と技術 発行所 京都、ミネルヴァ書房、新書一八六頁、定

価二二〇円

「ケースワーク」という言葉が、日常のわれわれの用語として消化されつつある今日であつても、まだ一般に社会福祉の分野におけるケースワークの意義が厳密に理解されたいとはいえない。しかも、ケースワークにおいては、理論が実際の役に立てられなければならないし、理論と実際の結びつきが特に強い分野で、本書のようなその原理と技術の入門書はきわめて意義ふかい。著者はかつて京都社会福祉研究所、市民生局、民生安定所などの研究員、ケースワーカーなどをへて、現在は文学部で社会福祉を専攻している。「はしがき」に著者は「理論的研究も未熟で実践的経験も浅い私は、社会事業新書の一つとして、ケースワーク入門を書くことに、ためらいを感じた。しかし、はじめに述べたようなことを解明していきいたために、書く決心をした。」と述べているが、最近本書は第五刷を重ねた。

国分緒子著（同窓）「京のお飯菜」発行所、東京、婦人画報社、B 6 一八五頁、定価三五〇円、著者は仙台で生れて、同志社高女を経て、女専家政科に学ぶ。夕刊京都の学

芸部長をへて今は論説副委員長。著者の名を高くしたのは京味百選で、それにづいて雑誌「あまカラ」に連載された「京のお飯菜」である。この本の内容は、著者が足と根氣とで、家々を採訪して書かれた家常茶飯で、お金があがなうことのできない京都の真味についてである。あとがきで著者は、「京味百選を書いたあと、私は家庭料理について一層深く考えたいと思い、また、かねてから京都の女の方が大そう家持上手であること、京都の味がいかにも洗練されていることなどについて感心して見えたこと」などがこのお飯菜を書くきつかけになったのだと述べている。

那須乙郎編（女子高教諭）句集「燈影」発行所、京都、いづみ句会 非売品

昭和三十一年以来毎年一冊句集を上梓したこの句会の第七句集で、会員堂本漆軒氏筆の美しい口絵のある樹形本。画家、工芸作家、報道、医師、会社重社、教職、家庭婦人ら十九人が一人三十句を自選したもので何れも高年者特有の寂びた心境で自然と人生をながめている。